

厚年

KOSEI
NENKIN

ゆふいん

No.195

発行所

湯布院厚生年金病院
大分郡湯布院町川南252
TEL.0977-84-3171

発行人 有田 眞
編集人 室岡 龍郎

2004.〈冬号〉



目次

- 地域リハ調整者・ケアマネージャー・在宅介護支援センター合同研修会……2
- さざり会忘年会……2
- 第143回 心のリハビリ……2
- 第144回 心のリハビリ……2
- さざり会旅行 町内1泊……2
- 特別投稿/「人は城」……3
- 特別投稿/「存続、充実運動について」……4~5
- フリージアの花束……5
- 天使が舞い降りた……5
- 新採用……5
- HAPPY WEDDING! ……5
- 論文・学会発表……6~7
- 由布の風……7

地域リハ調整者・ケアマネジャー・在宅介護支援センター合同研修会

ムーミン 稲積 幸子

2月26日（土）、地域リハ調整者・ケアマネジャー・在宅介護支援センター合同研修会が開催されました。この日は、あいにくの雪となり参加予定者を15名下回り56名の参加となりました。

研修は、午前中は講義、午後はグループワークでした。講義は地域リハ調整者・ケアマネジャー・在宅介護支援センターの役割や今後の展望について、県健康対策課より大津孝彦氏、居宅介護支援事務所清流荘 所長 時枝琢二氏、高齢者ケアセンター茶寿苑 苑長 渡辺宏一氏の3名の方よりそれぞれの職種や役割を取り巻く最新の情報を交えながら学び、地域リハビリテーションの重要性について理解を深めました。午後からは圏域を基本単位としたグループに分かれて関連職種の連携構築について討議し、課題を出し合い解決に向けた具体策を導きました。各班ともに短い時間ではありましたが、有意義な討議が行われた様子でした。また、地域リハの啓発や他職種と連携することの必要性を改めて感じた研修会になったのではないかと感じました。



さざり会忘年会

今年も「さざり会忘年会」が12月10日ゆふいん山水館で開催されました。恒例になったビンゴゲーム等がおこなわれ楽しくなごやかに今年1年をしめくりました。



第143回 心のリハビリ (1月17日)

「介護保険改正に関する現在までの議論とその方向性について」

第144回 心のリハビリ (2月14日)

「医療安全管理院内研修会（事例の報告）」
(株)アトル経営相談グループリーダー 梅村康浩

さざり会旅行 町内1泊

「客室係の昌子さん」

看護部 平井 雅子

年間4百万人の観光客が来るといわれる湯布院。その代表的な旅館の一つである亀の井別荘に宿泊した。落ち着いた雰囲気、おいしいご馳走は勿論だが客室係の昌子さんのおもてなしに心温まった。昌子さんは親しみやすい表情で話しかけてきた。決して馴れ馴れしいものではなく、「大事にされている感覚」が自分の中に湧いて来た。病院もサービス業である。後遺症を残し不安で一杯の患者様にも、私が感じた“大事にされている感覚”を持ってもらえるような対応を心がけたい。

厚生年金問題の本質的な問題が先送りされる中、なぜか厚生年金事業団の存在が与党の中で問題視され事業団の存続は困難であると報道されています。事業団の運営する当院はどうなるのか、断片的な情報しか得られない中で、根拠のないうわさ話もまことしやかにささやかれています。このことを耳にして将来への不安が増してきている人もおられる事でしょう。

この病院に育ててもらい、この病院を愛するものの一入人として、この病院が今までと同様に患者さんに喜ばれ、またそれを糧として職員も幸せに働けるという伝統を守っていきたくてこのエッセイを桑野編集長にお願いして書かせていただくことにしました。

戦国武将の武田信玄が残したとされる言葉に「人は城」という言葉があります。

山が主体の資源に乏しい甲州で、いかに国を発展させるかに心を砕いた信玄がその中心に据えたのが人なのです。人材を大事にして、人をひきつける信玄の手法は次々に新しい事業を成功させ国が発展しました。

自動車産業などの製造業は、次々に機械化、ロボット化を進めて、リストラと称して人材をなるべく少なくするほうに動いて、好業績をあげています。しかし、医療はそうはいきません。医療が進歩したとはいえ、最終的に判断をして、患者さんに必要な治療やサポート、心のケアを行うことなど、とても機械につとまるとはとても思えません。いい医療を行う病院ほど数多くの医療スタッフが必要なのです。

医療は病める患者さんに対して生身の人間が、専門的知識と暖かな心を持って患者さんのお世話にあたり、幸せな生活を取り戻してもらうもしくは満足の行く人生を送ってもらうようにお手伝いすることがその本質です。学校で学んだ理屈だけではまったく役に立たず、実際に働きながら、悩み、苦しみ、先輩にあるいは患者さんから学びながら経験していく事で医療に携わっていくのです。そして、これらの経験は次々に次の世代に受け渡して伝統となっていくのです。病院の建物や医療器械などのハードウェアはお金があればすぐにでも作れます。しかし病院のスタッフの経験とその伝統は一朝一夕には作れないのです。皆さんも自分が病気になったとき、建物や設備の立派さでなく、そこで行われている医療の質が高いあるいは優しい心遣いのある病院で治療を受けたいと思われるでしょう。これこそが病院の評判というもので、当院には幸いにこれまでの先輩職員の方々と患者

さんが作り上げた伝統と評判により多くの患者さんに来ていただいています。私はこの病院に来る前の10年間、他のいくつかの病院を経験しましたが、この病院は職員が際立って暖かい目を患者さんに注いでいる病院です。就職以来この病院にずっといる方々にはピンと来にくいかもしれませんが、優れた伝統はその存在が空気みたいにあたりまえになっているのです。私は、自分や家族が病気になった時に自分の働いている病院で治療を受けたいとスタッフが思える病院こそいい病院の条件だと思うのです。そしてこの病院はこれまでそうであったし、今もそして今後もいい病院の条件に当てはまると思っています。これからもこの伝統を守り次の世代へ受け渡していく責務がわれわれにはあるのです。

当院は今のところ、公益性の高い団体（自治体や公益法人）などに経営権を譲るか新しい公益法人をいくつかの病院とともに設立する方向で検討されています。いずれにしろ、病院が廃止されることはまずありえないことだと考えています。現在の病院のいいところを残すためにはやはり営利企業でなく、公益性の高い法人へ移行することが望ましいと考えられますが自分たちでこの病院の行く末を決められないのは歯がゆいところですが、少なくともこれまでであった年金財源からの公費投入はなくなり、施設、医療機器などは自前で整備することになります。しかし、幸いなことに当院はこれまでに、病院建物の整備をほぼ完了し、リハビリ専門病院として機能を特化していくことにより、高額な医療機器を必要とする先端医療ではなく、人材を生かした当院にしかできないリハビリ医療を行う方針です。そしてその人材はすでにそろっているし、新しい人材を育てていくシステムも完成しつつあります。あとは、職員一人一人が、この病院をより良くするために何をしたらいいかを問いつづけて実行することなのです。

私はこの病院の将来を楽観しています。それは、数多くの職員の方々が医療の本質を見失わず日々仕事に励んでおられるし、この病院のことを好きだと思っていることを知っているからです。この病院変革の波はピンチととらえられがちですが、職員全体の気持ちをひとつにし、よりよい病院への発展するチャンスになると思っています。誇りを持って、この病院での仕事を続けていかれるようにみんなで力を合わせていければ今まで以上によい病院になれると考えています。

特別投稿 「存続、充実運動について」 看護部 山本美江子

この冬一番の寒波でしたが湯布院の辻馬車が動き始めて春の到来です。お元気ですか。

病院の廃止・売却問題ではご心配いただきありがとうございます。現場にいる者以上に先輩始め多くの方々が心配してくださっていることに驚くとともに感謝しています。

社会保険庁の不祥事が発覚し始めてからのすさまじいばかりの内容はその社会保険庁が設置し運営を委託している組織で働いてきた者にはショックでした。

漠然とした不安が形になって表れてきたのが昨年3月10日の与党年金制度改革協議会「年金福祉施設等の見直しについて（合意）」でした。与党（自民・公明）合意の内容は今後5年を目処に全施設を売却して年金資金へ貢献する（返す）ことを基本とし、厚生年金病院については地域医療にとって重要な病院はその機能が維持できるよう十分考慮するというものです。具体的には17年度に独立行政法人を設置し精算することになっています。たとえば湯布院病院は土地はいくら、建物はいくらかと値踏みして入札です。

この合意を元に国会でも取り上げられましたが10の年金病院はどこも健全な経営で黒字運営であることが公表されましたのでモシヤの期待もありました。与党内でも一律売却とはいかかなものかという見直しの意見があることが報道されましたのでモシヤ、モシヤでよい方へ考えたくなくなりましたが先月の2月25日与党社会保障政策会議では昨年の合意をあらためて確認するに止まりました。

10病院の病院長は国に対して「公的機能を守るためにも同じ運営組織で10病院の包括経営をさせてほしい」と早く申し入れをしています。

昨年11月13日桑原寛名誉病院長を世話人代表とする「厚生年金病院と保養ホームの存続・充実を願う会」が結成されました。隣接する保養ホームの利用者と病院OBが声をあげました。数日前のOB会総会で有田病院長から現状の報告がありましたので呼応できたのですが「お世話になった病院」「これから患者として利用する病院」「何か自分達に出来ることはないか」と一人一人の胸に去来する驚き思いが基盤になりました。

保養ホームはご存知のように病院と一体になって病院と家庭の中間施設として、入院するほどでないレベルの方が自律して健康を取り戻される癒しの宿としてすでに24年の実績をあげています。病院とセットになって質の高いサービスを提供してきました。

ホーム利用者とOB会が病院に協同を要請し基礎が鼎となってより強固な会になり「湯布院厚生年金病院と保

養ホームの公的施設として存続・充実させる」運動としてスタートしました。

ホーム利用者・OB・患者・ゆふいん日より会員・職員および職員家族に加えまだ病院やホームを利用されたことのない方も賛同会員になってくださり会費と寄附をいただきました。現在会員は800人を超えています。

年末までに湯布院町長はじめ町議会議員、各種団体、組織を訪ね署名活動に賛同していただきました。湯布院町の諸々の問題と時期が重なり少し混雑しましたが驚くほどの協力を得られています。署名に平行して大分県知事と県議会および湯布院町、玖珠町、九重町、庄内町、狭間町の町長と町議会に請願を提出しました。湯布院町はすでに採択され町長と町議会それぞれから県知事と国に対し要請が出されています。

県選出の与党国会議員および副大臣とは面会し要請しました。

会の運動として湯河原病院と連携がとれました。2月16日「湯河原の会」が結成され続いて19日には大阪病院がスタートしました。登別病院は昨年秋に地域から立上がりがあります。それぞれの病院の事情が少しずつ異なりますので一斉にまとめるにはまだ時間もかかるのでしょうが会の運動の効果をあげるにはやはり病院同士の結束が重要になってきます。

第一次東京行動は2月28日より3月3日にかけて行いました。西厚生労働省副大臣には東京病院木全院長も同席され32572名の第一次締め切り分の署名を渡しました。

東京行動には湯河原の会と東京および近郊の会員4名も参加しましたので総勢23名が副大臣室にはいり熱気十分でした。予定の30分を目いっぱい訴えました。

与党・野党の幹部や秘書、県選出の国会議員、記者クラブ等使えるところはすべてあたってきました。近日中に報告会を開いてぜひ、聞いていただきたいと思います。

さて、皆さんが一番心配してくださっている現場の職員の反応ですが落ち着いて職務を全うしています。このような事態にあつて動揺が走るのではないかと懸念されましたが強力なリーダーシップのもとにますます結束していけるとみます。もちろん、どこにでも例外はありますがきっと反応の時間の問題でしょう。お目覚めに時間がかかるが動き始めたらさすが湯布院病院ですよ。

今年になって運動推進のプロジェクトチームが結成されて目覚ましい活動をしています。病院創立から43年、今までにも危機は何回もありましたね。もちろん、今回のような根幹を揺るがす規模ではありませんがその時々

のリーダーの元に力を合わせ心をひとつにして乗り越えてきましたね。この病院の、現場に培われた文化、伝統、気候風土みたいなもの・・・うまく言い表せませんが、きっと自分達の意思を反映することができると思っています。この四ヶ月の間、この病院がいかに沢山の方々によって支えられてきたかをあらためて教えられました。土地や建物は国から貸与されたものとはいえ地域と患者・利用者とともに心をこめて練られ、織り上げられて出来上がった中身です。そしてまだまだ成長し続けている作品であり貴重な財産であることを忘れてはいけません。改革の名のもとに何もかも捨てることは言語道断である

ことをもっと皆が自覚し、声をあげるべきだと思っています。その時代を反映して出来上がった作品は又作るには困難な部分もあることを知ってほしい。

どちらにしても現在の病院はなくなります。もちろん名前も変わります。先になって発展的解消だったと思いきこせるような運動にしなければならないと思っています。

歴史の中に培ってきた大事なものをうまく次のステップに移せることを願って現場とともに会はがんばります。引き続きご支援とご協力をお願いいたします。お元気で。



『近頃思うこと』

看護部 T. H

わたしが湯布院で暮らし始めて9回目の春を迎えようとしている。湯布院の住民になる12～13年前に旅人として訪れたのが最初である。それ以来山登りや温泉を楽しむに何度か訪れた。正直に言うと昔の静かな湯布院が好きである。しかし、今も尚わたしを「とりこ」にしている由布岳。天気が悪く由布岳が見えない時は、「旅人さん達由布岳が見えなくて残念だったね。損したね。」と声を出して言いたくなる。こんなに大好きな山なのに眺めるだけの日々が3年くらい続いている。

最近のわたしの楽しみは土いじりである。花づくり、野菜づくりと言えない辛さ。雑草に負けて育たない野菜、種を蒔く時期が遅くなって収穫できない野菜。植えないままポットで枯れてしまった花の苗。なんとも惜けない話である。しかし、全てが失敗したわけではない。少し

若かった頃は休みに合わせて雨や雪が降っても作業をしていた。根気強さがなくなり、忙しいと言い訳しているわたし。

土いじりをしていると時々見つけるときがある。なにげなく置いた植木鉢の下に多年草の芽が必死に伸びようとしている姿を。何気なく行動した事とその命を脅かすことになる。冬を越す食物の多くの芽生えは冬の寒さを感じて蕾をつける。寒さも必要だということである。

わたしたちはもすぐ20数名の新人を受け入れる。人と関わる時、土いじりで感じた多くのことを活用できると感じる。適時に適した内容の関わりが必要。相手を傷つけようと思わなくても傷ついている時もあることを知っておくこと。人的環境は非常に重要ではある。時には厳しさ(寒さ)も必要。このような時は、こちらの気持ちが正しく伝わるような言葉や態度で臨むこと。成長する芽は、こちらの気持ちが正しく伝わるような言葉や態度で臨むこと。成長する芽は限りなく伸ばせるように援助する。個性を尊重する。(原産国を知る。) などなど・・・

湯布院町もわたしたちの病院も大変な時を向えている。湯布院町や病院がどんなふうになってほしいのか、どんなふうにしたいのか、そしてわたしがこれから先どう生きたいのか、最近はめずらしくこのような難しいことを少し考えているわたしがいる。



【看護師】

戸田純子(平成16年12月12日)長男・悠登(ゆうと)くん誕生

新採用 【内科医員】
宇都宮香苗(平成17年2月1日付)



【内科医員】野澤 伸禎(平成16年12月3日ご成婚)
鶴井美枝子

【看護師】藤田 智恵(旧姓/林)(平成17年1月15日ご成婚)

— 論文・学会発表 —

論 文

著 者	題 名	雑 誌 名
【リハビリテーション室】 高橋朋子 (PT)	“実用的”って何だろう 第5回排泄編 患者の活動・参加を広げる排泄自立へのアプローチの実践	自立支援とリハビリテーション Vol.2 No5 P61～64
【リハビリテーション室】 上田直樹 (PT)	“実用的”って何だろう 最終回 IADL 編 患者個人の生活観や個性を引き出す	自立支援とリハビリテーション Vol2 No6 P75～79
【リハビリテーション室】 外山 稔 (ST)	失語症に記憶障害を合併した頭部外傷に対する人名学習訓練	総合リハビリテーション 第32巻 第12号 P1191～1196 2004. 12. 10
【リハビリテーション室】 衛藤 宏 (MD)	室内の工夫 2 浴室周りの工夫	クリニカル リハビリテーション P81～84 Vol.14 No.1 2005. 1

学 会 発 表

発表者名	題 名	学会名/発表年月日
【栄養部】 三重野優子	アンケートによる心臓リハビリテーション患者の 食生活習慣の調査について	第4回大分県栄養士学会 【平成16年12月11日】
【栄養部】 井上浩子	リスクマネジメントへの取り組み	第4回大分県栄養士学会 【平成16年12月11日】
【医 局】 日隈康雄	当院におけるTKA後のリハビリテーション	大分県リハビリテーション医学会 【平成16年12月11日】
【リハビリテーション室】 尾方英二	転倒予防教室の紹介と今後の取り組み	第8回大分県理学療法士学会 【平成16年12月19日】
【リハビリテーション室】 吉村修一	活動・参加の向上に向けたPTの生活マネジメント	第8回大分県理学療法士学会 【平成16年12月19日】
【リハビリテーション室】 金只悠司	入院中の成果を在宅に活かすために	第8回大分県理学療法士学会 【平成16年12月19日】
【リハビリテーション室】 森元大樹	回復期リハ病棟における患者介入への質的变化	第39回大分県脳卒中懇話会 【平成17年1月22日】
【リハビリテーション室】 外山 稔	実用的コミュニケーション活動の評価に向けた予備的調査	第39回大分県脳卒中懇話会 【平成17年1月22日】
【ムーミン】 北野留美子	当院における訪問リハビリテーションの展開 ～サービス提供地域における現状と課題～	第39回大分県脳卒中懇話会 【平成17年1月22日】
【リハビリテーション室】 樋口智子	回復期リハ病棟における専従STに求められるもの	第39回大分県脳卒中懇話会 【平成17年1月22日】
【看護部】 平井雅子	歩行や立位を前提とした療養環境への取り組み ～症例を通して～	第39回大分県脳卒中懇話会 【平成17年1月22日】
【心理相談室】 加藤真樹子	チーム医療でのスタッフ支援 ～リハビリテーション病院における試み～	九州臨床心理学会第33回大分大会 【平成17年1月30日】
【医 局】 日隈康雄	後方進入による人工股関節・人工骨頭置換術後に 前方脱臼を生じた4症例	第35回日本人工関節学会 【平成17年2月4日】

発表者名	題名	学会名/発表年月日
【医局】 大隈和喜	神経性食欲不振症母親患者の母性回復過程からみた行動制限療法の効果	福岡国際会議場 【平成17年2月5日】
【リハビリテーション室】 津留翔子	高次脳機能障害の患者における早期在宅を目指した環境調整～ICFモデルの視点に立ったアプローチを实践して～	第8回大分県作業療法学会 【平成17年2月6日】
【リハビリテーション室】 大野沙織	重度の障害を呈した患者の家庭復帰を通して学んだチームアプローチの重要性について	第8回作業療法学会 【平成17年2月6日】
【ムーミン】 田中睦英	地域リハ・ケア支援システム構築の必要性について～通所リハビリテーションの事例を通じての検討～	第8回大分県作業療法学会 【平成17年2月6日】

◆ ◆ ◆ その他研究会

発表者名	題名	学会名/発表年月日
【医局】 日隈康雄	後方進入による人工股関節、人工骨頭置換術後に前方脱臼を生じた4症例	大分人工関節研究会 【平成16年12月2日】
【看護部】 安部寿美	回復期リハビリテーション病棟における看護の実際	平成16年度 回復期リハビリテーション病棟研修会 第4回看護研修会 【平成17年1月15日】
【医局】 衛藤 宏	リハビリテーションの流れとその重要性	戸畑区医師会館 【平成17年1月20日】
【心理相談室】 加藤真樹子	包括的心臓リハビリテーションにおける心理臨床活動－湯布院厚生年金病院の心リハチームでの取り組み－	第11回北九州心臓リハビリテーションセミナー 【平成17年2月10日】
【医局】 衛藤 宏	リハビリテーションの流れとその重要性－回復期から維持期、そして地域リハへの流れ－	日出町保健福祉センター 【平成17年2月17日】



由布の風

『温泉道』

リハビリテーション室 日高隆之

私が湯布院に来て早いもので3年が過ぎようとしています。昔から温泉好きの私にとって町内の温泉はもちろんですが、別府温泉は憧れの温泉地でした。そのため、週末の休みは温泉道具片手に別府まで出掛けていました。

別府の温泉は市内八つの温泉郷（別府、浜脇、観海寺、堀田、明礬、鉄輪、柴石、亀川）があり、源泉数2848、泉質10種類（別府に無いものは放射能泉のみ）、湧出量1日136571kl（9日で東京ドームが一杯になる）と名実ともに日本一の温泉地です。その別府の温泉を極めたいと思い、知ったのが別府八湯温泉道の存在でした。別府八湯温泉道とは市内135の湯のうち好きな88湯を

巡るスタンプラリーの事です。それぞれスタンプの数によって、段位認定（段位に応じた色タオルと認定状の発行）が行われ、スタンプ8種で別府八湯温泉道初段となり以下8種毎に二段、三段と昇段し七段になったら二万円相当の入湯無料券がプレゼントされ、見事88湯入湯した暁には名人に認定されます。名人になると鉄輪のひょうたん温泉に開設される「温泉道殿堂」に肖像写真を展示され毎年の温泉祭りで表彰（少し恥ずかしい気はしますが…）されます。

これは面白い企画だなと思い、私も名人目指して三年前より挑戦し現在のところ39湯（残り1湯で五段に昇段）とやっと半分近くまで来たところです。今まで入湯した中でお気に入りの所は、数多く存在する共同浴場です。なぜなら地元の人々とお湯の特徴や歴史などの話に耳を傾ける事ができ、一味違った温泉タイムが過ごせるからです。

まだまだ、寒い日が続く温泉が恋しい時期ですが、皆様も別府に行かれた際には挑戦してみたいかでしょうか？

病院の理念・基本方針

1. 成人病リハビリテーションと地域医療を担う中核病院としての誇りと自覚に立ち、患者さんを大切に、いつも笑顔で真心こめて高度な医療を提供します。
2. 地域リハビリテーション活動を支援・推進し、地域の保健・福祉の向上に貢献します。
3. 「この病院があって良かった」、「この病院であって良かった」と、言われるような病院づくりを目指します。



— 編集後記 —

今、いろいろな事がまわりを渦巻いていますが、後藤先生のエッセイにあったように、今、この時こそ、年金病院の誇りを守ってゆきましょう。明日の光が見えていますよ。〈J〉